

新入生の皆さんへ

～今、大学は皆さんを変えられるのか？～

高 畑 由 起 夫

20世紀初頭、新入生たちは大学から圧倒的な文化的ショックを受けました。これがハンス・カロッサの小説のタイトル“美しき惑いの年”です。夏目漱石の『三郎』でも、熊本から上京した主人公はすべてに翻弄されます。時代が動き、目覚めない者を置き去りにしていく（“赤の女王仮説”を彷彿とさせます）。「(日本は) 滅びるね」という言葉、「光線の圧力を試験する」という先輩、そして女性によせる淡い思いははかなく断ち切られる。あとは、そこから己をどう変えていくのか、それが課題として残されます。

一方、同時代の小説『あしながおじさん』の主人公ジョディにとって、大学は孤児院の閉鎖社会からの脱出であり、自分の能力を見つけ、それを試すチャンスでした。“教養”を身につけ、なにより孤児院の外の“世間”を知ることで、幼虫がさなぎを経て蝶に変身するのです。

残念ながら、今日の大学にはこうした新入生への衝撃力が落ちているようです。皆さんにとって、どんな話もTVやWeb等の映像で先刻ご承知、PCをクリックすれば世界中からどんな知識も得られる。大学で学ぶことがどんな意味を持つのだろうか？と思っても当然というべきです。

それでは、大学での学びに意味があるのか？ おそらく、それは“ものの見方”、そして、それを通じて問題を一つ一つ解決していくやり方を身につけることでしょう。これこそが教養です。同じ“もの”を見ても、人によって解釈は異なります。万有引力をニュートンが理論化するまで、リンゴの実はむなしく地に落ちていました。アダム・スミスがあらわれるまで、商業という人の営みは、宗教からも、世間から軽視されていました。それが、ある時、“啓示”を受けたように、人々の目から鱗が落ちる（使徒言行録第9章18節）。

世界は謎に満ちていますが、その謎が謎だと気付くこと自体に、やはり“訓練”が必要であり、その謎を解くためには知識が要る。大学とは、先生方も含めて様々な人たちと出会い／交流することで、意識せぬうちに訓練を積み、知らぬうちに知識を蓄える場所だと言えそうです。そのためには、知らぬ人と出会い、知らぬ土地を尋ね、読んだことのない本を手取る。そうすれば、皆さんのまわりの世界が、それまでとは変わって見えてくるはずです。

(総合政策学部教授)